

## 1605年慶長大地震の震源域について

—— 南海沖・房総沖2元説への疑問 ——

建設省建築研究所・国際地震工学部 石橋克彦

● 1605年慶長大地震(2月3日19~21時頃:慶長9甲辰年12月16日戌刻)は、南関東・東海地域の地震発生を考える上で重要である。現在の定説<sup>1)2)</sup>では房総沖と南海沖の2元地震と言われるが、場合によっては東海沖地震に数えられることもある。今村<sup>3)</sup>は東海道南海道沖震源説を主張した。以下に再検討を試みる。

## ● 房総沖震源域説について

1. 外房地方の大地震・大津波が房総沖震源域説の最大の根拠である。武者<sup>4)</sup>には、これに関して、A当代記・B東照宮実紀・C房総治乱記・D武江年表・E大宮神社古記録抄の5点の史料がある。しかし、Bは1800年代の成立でAの引用、Dは1848年の成立でCの焼き直し、しかもCは、今村<sup>3)</sup>が言うように軍記物で全面的には信じ難い。AとEによれば、御宿付近でかなり揺れたことと外房が大津波に襲われたことがうかがえるが、これだけでは房総沖に震源域がなくともよい。

2. 八丈島の大津波も房総沖震源域説の根拠になっている。同島は、57人死亡・田畑過半損亡という大津波に襲われたという<sup>4)</sup>。しかし、房総沖に震源域を持つ1703年元禄関東地震でも1953年房総沖地震でも八丈島の地震動は強かったのに、本地震の場合には、4点の八丈津波記事<sup>4)</sup>の中に地震動のことはひとつも書かれていない。もちろん、記事が無いからといって揺れなかったとは言えないし、「津波地震」だった可能性もあるが、留意したほうがよいことである。

3. 三浦三崎で大津波のため153人死亡したと従来言われており<sup>1)2)</sup>、房総沖震源域説に調和すると鬼われている。しかし、出典の「蒼屋雜記<sup>4)</sup>」には「三崎」と書かれているだけであり、この書は土佐国群書類(周囲の吉村春峯が纂大成した土佐の史料叢書)所収のものだから、これは高知県土佐清水市の三崎のことである。

4. 1707年宝永地震によって、九十九里地方はかなりの地震動と津波に襲われ、片貝町作田川(?)で津波のため14人が死亡した<sup>5)</sup>。東海沖の大地震によってこのような被害が生じたことは注目に値する。

5. 慶長6年10月16日頃、別の大地震津波が房総半島を襲った疑いを、现阶段では否定出来ない。それを記すものは次のとおり。a先祖伝来過去帳(八積村元台田家文書)<sup>6)</sup>「慶長6辛丑年10月16日大地震~17日子刻

大津波」b房総治乱記(1650頃~1668年成立)「慶長6辛丑12月16日大地震~17日子刻大津波」c房総軍記(1750年代頃成立?)「慶長6年辛丑冬10月16日大地震~17日子刻大津波」d関八州古戦録(1726年頃成立?)「天正18庚寅2月16日夜大地震~18日子刻大津波」いずれも記述がよく似ており、a(史料価値不明)を除けば軍記物だからいかがわしいが、歴史専門家による検討が望まれる。

6. 結局、房総沖震源域説は、定説になるほど説得的ではない。また2元地震説はやや不自然にも鬼われる。

## ● 震源域について

本地震によって西伊豆の仁科・浜名湖岸の舞阪と橋本・伊勢などが大津波に襲われた<sup>4)</sup>。また掛川城が被害を受けた疑いも指摘されている<sup>7)</sup>。これらを総合して、先に筆者<sup>8)</sup>は、本地震の震源域は南海沖~東海沖~伊豆東方縁沿いであって南伊豆隆起<sup>9)</sup>の一部はこの時のものではないか、という考えを提案した。そうであれば外房と八丈島(ある程度)の大津波も説明出来る考えたからである。しかし、南伊豆隆起を重視しなければ、前節4項により、基本的に宝永地震と同じ震源域だった可能性もある。江戸・外房・室戸半島(大地震)や京都(無感に近い)の地震動と九州・四国・大阪湾の津波も考慮して強い地震像を描くと、南海沖ではトラフ軸に近い津波地震、東海地方では南海沖よりは短周期地震動の多い半津波地震、ということになるだろう。しかし疑問点は多く、東海地方の史料が少ないという問題も含めて歴史学者による本格的な考証が望まれる。

● 文献 1)宇佐美1975東大出版会 2)羽鳥1975 BERI 3)今村1943地震I 4)武者1941文部省 5)関東地区災害科学資料センター-1977 6)菊地1976古今書院 7)関1976掛川市 8)石橋1976秋季地震学会 9)福富1934地震I。

